

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	藤井 千晶
論文題目	東アフリカ沿岸部における「スンナの医学」 ーイスラームをめぐる伝統と改革ー		
(論文内容の要旨) 本論文は、東アフリカ沿岸部に見られるイスラーム的な医療に着目し、その動態を描くものである。「スンナの医学」と呼ばれるこの医療については、これまでまとまった形で報告されたことはなく、本論文がその初めての試みである。申請者は、2006年から2008年の間の合計10ヶ月間、タンザニア（主にザンジバル）において臨地調査を行うとともに、アラビア語およびスワヒリ語で書かれた関連書目を分析することを通して、この対象に迫っている。 本論文は、3部8章からなる本文と、序章・終章から成り立っている。第1部は、本論文の背景となる情報を概観する。第1章では、東アフリカ沿岸部の地理、歴史、民族・宗教などを概説する。第2章は、イスラーム世界に古くから存在する預言者の医学（預言者ムハンマドの慣行に基づく医学）の伝統を、主として文献に基づいて確認する。他方第3章は、臨地研究に基づいて、現地で実際に行われているさまざまな医療を分類して示したうえで、そのうちイスラーム的とされている医療の比較を行っている。 第2部は、本論文の主題である「スンナの医学」の実態を明らかにすることを目指している。第4章は、その媒体となっているものを順に検討し、第5章は、この医学による実際の治療実践の実例を取り上げる。第6章では、この医学では病をどのように分類し、それとどうつきあうべきだとしているのかを検討する。第2部全体を通して、この医学が、第2章で検討したイスラーム世界の伝統的医学に基づいてはいるものの、近代という時代環境のなかで大きな変容を遂げたものであることが明らかにされる。 第3部は、それではなぜ、近年に至って、東アフリカ沿岸部においてこのような医学が隆盛しているのかを問う。第7章は、議論の前提として、当該地域における知の伝統の変遷を扱い、イスラーム的な伝統と一口に言っても、1964年のザンジバル革命以前に主流だったアラブ人を主たる担い手とするそれと、革命後の現地人（ザンジバル人）主体のそれとの間には、大きな相違のあることを指摘する。そのうえで、第8章では、革命前のイスラーム的な伝統のなかで、伝統的な預言者の医学がさらにその他のイスラーム諸学の要素も取り込み、ウガンガと呼ばれるイスラーム的な医学になったことを指摘したうえで、さらに革命後には、別のイスラーム的な土壌が生まれたことにより、このウガンガを批判して、よりクルアーンとスンナ（預言者ムハンマドの慣行）に忠実な「スンナの医学」が生み出されたと結論づける。現在、このスンナの医学が隆盛している理由として、本論文は次の2点を指摘する。第1は、クルアーンとスン			

ナの重視というイスラーム復興的思想を、サウジアラビアなどから持ち帰って東アフリカで展開している人々が、民衆に積極的に働きかけ、彼らの支持を集めていることである。第2は、それ以前の煩瑣な治療方法を伴った医学（上述のウガンガ）に比べ、この医学はより簡略で、民衆自身が容易に実践しうるものだという事実である。

本論文は、これらの議論を通じて、この「スンナの医学」が、イスラーム復興という潮流を東アフリカ沿岸部において具現化したものだということを示した。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、申請者が東アフリカで発見した「スンナの医学」というものの実態を叙述し、その正体をつきとめ、なぜそれが今日このように隆盛しているのかを問うものである。この「スンナの医学」は、これまでアフリカ研究、イスラーム研究のいずれにおいても、検討されてこなかったばかりでなく、その存在すら知られていなかった。

本論文の学問的貢献の第1は、「スンナの医学」という現在進行形の現象を、臨地調査に基づいて丹念に叙述・紹介した点にある。この聞き取り調査においては、申請者のスワヒリ語の能力がいかに発揮されている。

貢献の第2は、文献調査に基づいて、歴史を遡ってこの現象の源流を探求している点にある。この際には、スワヒリ語だけでなく、アラビア語の知識が援用されている。文字を介して長年にわたって学問が継承されてきたイスラーム世界を研究する際には、現代的現象といえども、その歴史的背景にじゅうぶん留意することが重要であるが、本論文は、前近代のごく早い時期に成立した預言者の医学まで時代を遡ったうえで、近代以降のザンジバルにおけるイスラーム的な知の伝統の変遷をたどって、現前の現象を位置づけようとしている。歴史を遡ることによって初めて、この現象がすぐれて現代的なものであることが浮き彫りにされる。

貢献の第3は、東アフリカの民衆のあいだに日常的に見られる治療行為の現場に密着しつつも、それを、イスラーム世界全体を席捲するイスラーム復興の流れのなかに位置づけようとしたことである。そこでは、同じようにイスラーム的という言葉で表現されていても、20世紀後半以降のいわゆるイスラーム復興の時代以降の用いられ方と、それ以前の用いられ方の間には大きな相違があることが明らかにされる。イエメンのハドラマウト出身のアラブ人たちが主たる担い手であった近代のイスラームは、ザンジバル革命後に排除され、新たにサウジアラビアなどが鼓吹する新しい形のイスラームが導入され、この新しいイスラーム（イスラーム復興）の一部に、「スンナの医学」は位置づけられると本論文は説く。一つのフィールドのなかでの観察を、より大きなコンテキストにおいて位置づけることに、本論文は成功している。

貢献の第4は、イスラーム的視点から分析することにより、東アフリカ研究に新たな知見を加えたことである。「スンナの医学」やその前身ともいえる伝統的医療は、従来の研究ではもっぱら土着の呪術と結び付けて理解され、イスラーム的な要素を含み持つものだとは考えられていなかったという本論文の指摘は、そのことを端的にあらわしている。

逆に、東アフリカという現場の事例を俎上にのせることによって、イスラーム研究に新たな知見を加えたことが、貢献の第5である。本論文で「スンナの医学」の淵源として言及される預言者の医学は、イスラーム研究のなかでは古典的学問分野として古くから知られてきたが、その伝統がその後も続いているかどうかについては、まったくと言ってよいほど知られていなかった。今回本論文が明らかにしてみせた現象は、それがそのまま継続していたというのではないが、その現代的改良版がイスラーム世

界の一部にたしかに息づいていることを、如実に示している。

以上のように、本論文は臨地調査の知見を文献調査によって位置づけ、東アフリカをイスラーム世界全体のなかで検討し、アフリカ研究にもイスラーム研究にも寄与するものである。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 22 年 1 月 19 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。